

キリスト教教育学研究（Ⅰ）

—宗教と文化との関連—

森 田 美千代

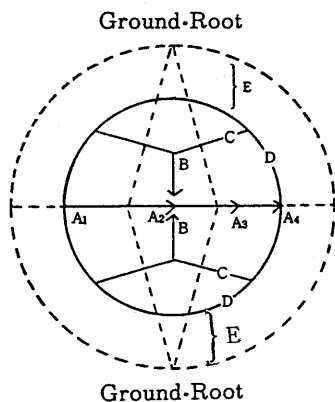
- I キリスト教教育の定義と構造
- II 宗教と文化との関連
 - (i) パウル・ティリッヒの場合
 - (ii) リチャード・ニーバーの場合
 - (iii) オスカー・クルマンの場合
 - (iv) 武田清子の場合
- III まとめ

I キリスト教教育の定義と構造

私は、キリスト教教育を、非本来の人間（現実の姿における人間、実存的人間）が、学ぶことを通して、本来の人間（「本」に結びついている人間、すなわち、Ground・Rootに結びついている人間）となることに、他の人間が仕えることである、と定義している。換言すれば、現実の姿における人間（アダム）が、学ぶことを通して、Ground・Rootすなわちイエス・キリスト（来るべき者）に結びついている人間（全き人）となることに、他の人間が仕えることである、といえる。

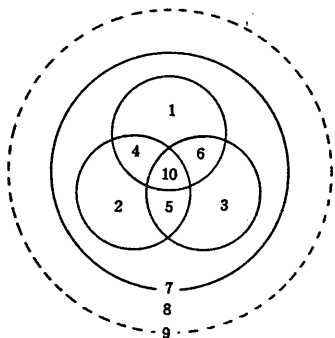
この、キリスト教教育の定義を構造化（図示）すれば、次頁のようになるであろう。

何回かにわたって、キリスト教教育学をできるだけ体系的に展開する予定であるが、その第一回目として、今回は、宗教と文化との関連を明らかにすることにする。宗教と文化との関連を明らかにすることとは、パウル・ティリッヒの場合においても、リチャード・ニーバーの場合においても、オスカー・クルマンの場合においても、武田清子の場合においても、いずれも、



全体が球となっており、左図はその断面である。

- A₁ 受胎の瞬間の子ども
- A₂ 子ども
- A₃ おとな
- A₄ 死ぬ瞬間のおとな
- B 仕える者(教会では、牧師、キリスト教教育主事、教会学校教師、教会員など キリスト教学校では、宗教主事、宗教主任、キリスト教教師など 家庭では、両親など)
- C キリスト教に関する教材(聖書)
- D } キリスト教史とその前線
- E }
- Ground } 根源(イエス・キリスト)
- Root }



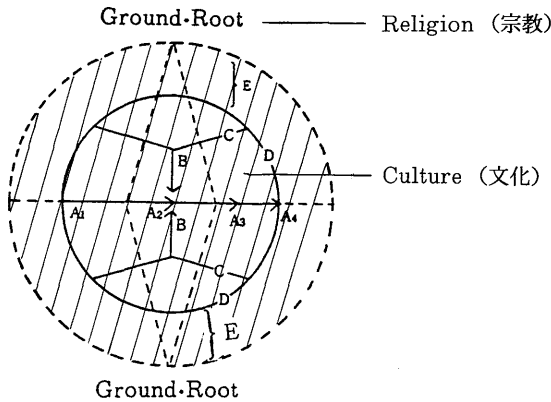
左図は、前掲図と同じ内容を表わしている、別の図である。

全体が球となっており、左図はそれを輪切りにしたものである。

- 1 A₁, A₂, A₃, A₄
- 2 B
- 3 C
- 4 キリスト教人間観、人間関係
- 5 キリスト教観、聖書観、教会観
- 6 興味・関心、信仰のレディネス
- 7 D
- 8 E
- 9 Ground-Root
- 10 キリスト教教育

次頁に図示するように、点線の部分すなわち Ground-Root と、斜線の部分すなわち A、B、C、D、E を含む部分(これを、文化と総称する)との関連を、自覚的にとらえ、それを明らかにしようとするのである。

この小論は、新たな構想のもとに書いたものであるが、論の展開上、キリスト教教育の定義と構造及びパウル・ティリッヒの項目は、これまでに発表してきた私の小論と、多々、重複していることを、最初にことわっておきたい。



II 宗教と文化との関連

(i) パウル・ティリッヒの場合

パウル・ティリッヒ (Paul Tillich) は、1886年8月20日に、ドイツのブランデンブルグ州のシュタルツェデルに生まれ、1965年10月22日に、アメリカのイリノイ州のシカゴにて、その生涯を閉じた。

彼は、自らの生涯を顧みて、自分は12の境界線上に (on the boundary) 立たされた、と述べている。それは、(1)父の気質と母の気質 (2)都市と田舎 (3)上層階級と下層階級 (4)現実と想像 (5)理論と実践 (6)他律と自律 (7)神学と哲学 (8)教会と社会 (9)宗教と文化 (10)ルター主義と社会主義 (11)イデアリズムとマルキシズム (12)本国と異国 である。⁽¹⁾ ティリッヒの生涯は、境界線上に立たされ続けた生涯であった。

さて、ティリッヒにおける、宗教と文化との関連は、彼の生涯からも推測しうることであるが、その関連は、どうであろうか。それは、「文化は宗教の表現 (形式) であり、宗教は文化の実質である。(Culture is expression (form) of religion, religion is the substance of culture.)」という彼の命題に集約されている。⁽²⁾

この命題を、彼は、次のような例をあげて、具体的に、説明している。「ラヴェンナのモザイクやヴァチカンの法王の礼拝堂の天井画や老レンブラントの肖像画に感動した人が、この人達の経験は宗教的であるかあるいは文化的であるかと問われるならば、その人は答えに窮するであろう。恐らく、

次のようにいうのが正しいであろう。彼の経験は形式に関していえば文化的であるが、内容に関していえば宗教的であると。」⁽³⁾

つまり、ティリッヒは、宗教と文化とは関連しており、宗教は宗教であり文化は文化である、と分離して考えるのではなくて、宗教が真の宗教であるためにはそれが文化の営みに受肉していなければならない、また、文化が真の文化であるためにはそれが何程か宗教的でなければならない、と考えた。

以上のような、ティリッヒにおける宗教と文化との関連性をもとにすれば、次のようなことが、宗教と教育との関連について、いえる。教育は文化の営みであるからして、ティリッヒのように考える考え方からは、宗教と教育とは、分離してはならず、いや分離させてはならず、両者の間には関連があること、そして、その関連のありようは、宗教は何らかの程度において教育の内実を示しており、教育は何らかの程度において宗教を表わしている、ということがいえる。

(Ⅱ) リチャード・ニーバーの場合⁽⁴⁾

リチャード・ニーバー (Helmut Richard Niebuhr) は、1894年9月3日に、アメリカのミズリー州のライト市に生まれ、1962年7月5日に、アメリカのマサチューセッツ州のグリーン・フィールドにて、その生涯を閉じた。

今回は、宗教と文化との関連を考察しているが、彼には、Christ and Culture (1951年)『キリストと文化』という、まさに今回のテーマそのものを考察した著書がある。従って、この著書を参考にして、彼が考える宗教と文化との関連を明らかにしたい。

彼は、宗教(キリスト)と文化との関連を、次の5つに分類している。すなわち、(1) Christ against Culture (文化に対立するキリスト) (2) The Christ of Culture (文化のキリスト) (3) Christ above Culture (文化の上なるキリスト) (4) Christ and Culture in Paradox (逆説におけるキリストと文化) (5) Christ the Transformer of Culture (文化の変革者キリスト) である。

(1) Christ against Culture (文化に対立するキリスト) について

これは、キリストと文化との対立 (opposition) を強調する。この立場は、神の意志と人間の意志、啓示と理性、キリストとカイザルとを、峻別する。文化が、キリストに対して、自己への忠誠を要求する時、この立場は、その

ことを断固拒否する。(Ap.45, A'p.75)

この、文化に対立するキリストの立場をサポートする聖書の箇所は、ヨハネの第一の手紙の第2章15節である。すなわち、「世と世にあるものごとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない。」つまり、この聖書の箇所の意味するところは、世は、サタン的な力の支配下にあり、カインの末裔であるから、そこに入ってはならない、ということである。(Ap.48, A'p.79)

この立場をサポートする、具体的な例として、ニーバーは、次のものを、あげている。それは、修道院生活やメノナイト派の人々やフレンド派の人々やトルストイなどである。修道院は、この世から隔離され、そこでは、この世が追求する諸目的(政治、経済、文化、科学、芸術)とは全く異なった、キリストに従う生活がなされた。(結果的には、この世の文化の発展に大いに貢献することになったが、それは、意図したものではなく、偶然的な副産物であった。)(Ap.56, A'p.90)メノナイト派の人々は、ニーバーによれば、一切の政治的関心を放棄し、かつ徴兵を拒否し、経済や教育においては自分達独自の習慣や規則に従った、ということである。(Ap.56, A'p.91)フレンド派の人々も、(過激になることはなかったが、)兵役忌避に関して、メノナイト派の人々と類似性を見出すことができる、としている。(Ap.56-p.57, A'p.91)トルストイにおいては、文化のあらゆる面(哲学、科学、芸術、国家、教会、財産制度など)が、否定された。(Ap.60, A'p.96)

この立場のメリットとデメリットは、次のようにいえよう。キリスト教において、反文化的要素が欠如する時、そのキリスト教は、文化のための功利的手段になってしまう。(Ap.68, A'p.108)従って、キリスト教において反文化的要素があることは、それを防ぐということにおいて、メリットがあるといえよう。ところが、人間は、文化の中で、文化の力によっても、人間になるようにされている存在であることは事実である。(Ap.69, A'p.109)従って、文化を全く排除してしまうことはできないし、排除しようという傾向性をもっているということにおいて、この立場はデメリットをもっているといえよう。

(2) The Christ of Culture (文化のキリスト) について

これは、キリストと文化との一致(agreement)、調和を強調する。この立場は、神の恩恵の働きと人間の努力、教会と世界との間に、緊張関係を感

じない。(Ap.83, A'p.131-p.132)

この立場の具体的な例として、ニーバーは、ユダヤ人キリスト教徒、キリスト教グノーシス主義者、文化主義プロテスタントなどを、あげている。ユダヤ人キリスト教徒は、当時のユダヤの伝統の大切な大部分を何ひとつ放棄することなしに、イエス・キリストに従うことができると考えた。(Ap.85, A'p.134)キリスト教グノーシス主義者は、(自らは忠実な信仰者であると考えていたが、)キリストを、文化全体に帰属させた。(Ap.85, A'p.134-p.135)文化主義プロテスタントとして、ニーバーは、ロック(1632-1704)、ライプニッツ(1646-1716)、カント(1724-1804)、ジュファーソン(1743-1826)、シュライエルマッヘル(1768-1834)、リッチュル(1822-1889)、ハルナック(1851-1930)、マッキントッシュ(1877-1948)などを、あげている。

この立場のメリットとデメリットは、Christ against Culture(文化に対立するキリスト)とはまさに逆になっている。この立場のメリットは、キリストと文化とを峻別しないことであるが、このメリットのなかに、すでにこの立場のデメリットをも同時に含んでいる。すなわち、キリストが文化(換言すれば、ヒューマニズム(人間中心主義)といってもよい。)に隷属ないし吸収されてしまうことになる傾向があるということなのである。そうなれば、異端というほかはないであろう。

(3) Christ above Culture(文化の上なるキリスト)について

これは、反文化的徹底主義者の立場も、キリストを文化に順応させる人々の立場をも、とらない。この立場は、この世界と他の世界との両方に属する一人の主を告白するものとして、キリストと文化との両者をともに承認する。(Ap.120, A'p.188-p.189)

この立場をサポートする聖書の箇所は、マタイによる福音書第5章17節から19節まで、第22章21節、第23章2節、ローマ人への手紙第13章1節及び6節である。(Ap.123, A'p.192-p.193)

この立場の具体的な例として、ニーバーは、アレクサンドリアのクレメンス(Clement of Alexandria, 150?-215?)、トマス・アクィナス(Thomas Aquinas, 1225?-1274)を、あげている。クレメンスのキリストは、文化のキリストであると同時に、すべての文化の上なるキリストであり(Ap.128, A'p.199)、トマス・アクィナスは、キリストと文化、神のわざと人間のわ

ぎを、思想および実践体系にまとめようとした。(Ap.145, A'p.225-p.226)

この立場のメリットは、文化を保存することを可能にしたことであるが、デメリットとしては、文化を保存することに力を注ぎすぎて、文化的保守主義になりやすいということがいえる。(Ap.146, A'p.228)

(4) Christ and Culture in Paradox (逆説におけるキリストと文化) について

この立場は、人間は文化に属していて文化から抜け出すことはできないということ、また、神は文化の中でそして文化によって人間を支えているということ、知っている。この立場の人々は、キリストと文化とを、そのような緊張関係においてみようとする特徴をもつ。このことを敷衍すると、人間は罪人であるがしかも義であり、人間は信じるがしかし疑うものとして信じ、人間は救いの確証をもっているがしかも不安定という刃の上を歩く、といった具合である。(Ap.156-p.157, A'p.244-p.245)

この立場の具体的人物として、ニーバーは、パウロとルターとを、あげている。まず、パウロについて。前述したように、文化の上なるキリストにある人々は、文化からキリストへと向かうが、パウロは、そうではなくて、文化の審判者であり贖罪者であるキリストから文化へと向かう。この順序の違いは、パウロの本質的なものにかかわることである。すなわち、文化の上なるキリストにある人々は、文化を、それとして肯定するが、パウロにとっては、文化はそれ自体では肯定される価値はなく、キリストによって文化が肯定されうる価値あるものへと変えられていくのである。ルターについて。ルターは、文化を、キリストに従うことができる場として、また、キリストに従うことがなされるべき場として、肯定した。(Ap.174, A'p.271) 彼にとって、文化とキリストとは、相互関係があるにもかかわらず明確に区別されなければならないものであるし、同時に、明確に区別されなければならないにもかかわらず相互関係があるものであった。

逆説におけるキリストと文化の立場のメリットとしては、キリスト教的知識とキリスト教的行為に対して、実存的に、かかわろうとしたことであるが、デメリットとしては、この立場は、文化的保守主義 (cultural conservatism) になる傾向があったということである。文化的改革を推進しなかったわけではもちろんないが、この立場の関心は、文化的諸制度や諸習慣のなかのただ一つ、すなわち宗教的なものだけにのみ、向けられていた。その他の事柄、例え

ば、国家や経済生活や奴隷制度や社会的階層の温存などについては、どちらかといえば変更を加えずにしておくことに満足していた。(Ap.188, A'p.291)

(5) Christ the Transformer of Culture (文化の変革者キリスト) について






リチャード・ニーバーは、この立場をとる。この立場は、キリストと文化との関係について、逆説におけるキリストと文化の立場と似た立場をとる。つまり、キリストと文化との間に緊張関係を認めるのであるが、この立場が逆説におけるキリストと文化の立場と違っている点は、この立場が、文化に対して保守的になるように関わるのではなく、文化を変革するように関わることであり、とニーバーは理解している。ニーバーは、次のように、説明している。文化に対立するキリストの立場による文化拒否や、文化のキリストの立場による文化の理想化や、文化の上なるキリストの立場による良質の文化にキリストを付け加えることや、逆説におけるキリストと文化の立場のような、不道德な社会にあってしかも福音によって生きることを願うことと、この文化の変革者キリストの立場は、違っている。(Ap.209, A'p.323-p.324)

この立場をサポートする聖書の箇所として、ニーバーは、ヨハネによる福音書を、とりわけ、第3章16節と17節とをあげている。すなわち、「神は、そのひとり子を賜ったほどに、この世を愛してくださった。それは、御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の生命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。」この福音書の主題は、ニーバーによれば、次のようである。歴史を意味あらしめる非歴史的なもの、時間を意味あらしめる無限なるもの、人々を意味あらしめそれ故に彼らの救い主である神、である。ここに、この福音書において、歴史的記録と霊的解釈とが織り成す複雑な性格の由来がある。(Ap.201, A'p.313)

この立場の具体的な人物として、ニーバーは、アウグスティヌス (354-430)、カルヴァン (1509-1564)、ウェスレー (1703-1791)、モリス (1805-1872) を、あげている。アウグスティヌスについて。アウグスティヌスにとって、キリストが文化の変革者であるのは、人間のすべてのわざにおいて表わされている人間の生命に、キリストは、再び方向を与え、再び活気づけ、再び生まれさせる、という意味においてである。(Ap.209, A'p.324) カルヴァンについて。彼は、アウグスティヌスにきわめて類似し、彼の思想と実践にお

いて、回心主義的理念 (conversionist idea) は、顕著である。ルター以上に、彼は、福音が生活のすみずみにまで現在浸透することを、待ち望んだ。(Ap. 217, A'p.336) ウェスレーについて。彼にとって、キリストは、生命の変革者 (the transformer of life) であり、人々に信仰を与えることにより人々を義とし、そして、人間の行為の源泉 (the source of human action) を取り扱う。(Ap.219, A'p.338) モリスについて。彼においては、文化における人間の進歩ではなくて、文化を生み出す人間の精神の神的回心 (the divine conversion of the spirit of man) が、大事であった。モリスは、神の国は内側から始まる、と理解していたが、さらに彼は、その神の国は外側にもあらわになるべきである、つまり、我々の全社会的存在に浸透すべきである、とも考えていた。(Ap.228, A'p.352) 彼が、文化の変革者キリストの立場の具体的人物に入れられる理由が、ここにある、といえよう。

最後に、リチャード・ニーバーにおける宗教と文化との関連を、表にしてまとめると、次のようになろう。

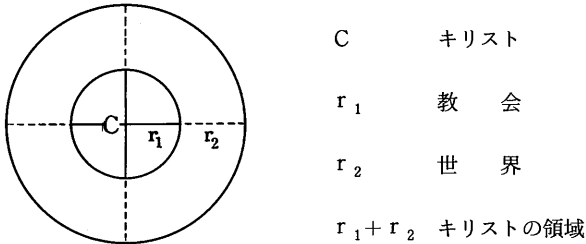
タイプ	キリストと文化との関係	キリストと文化との連続性・非連続性	イエス・キリストをどうみるか	文化をどうとらえるか	聖書の箇所	具体的人物
(1) Christ against Culture	against opposition 対立	非連続 キリスト 	反文化的キリスト	文化拒否	Iヨハネ2:15	修道院 メノナイト派 フレンド派 トルストイ
(2) The Christ of Culture	of agreement 一致 調和	連続 キリスト 	偉大な教師 人間の理想	文化の理想化	特に明示されていない	ユダヤ人キリスト教徒 キリスト教グノーシス主義者 文化主義プロテスタント
(3) Christ above Culture	above on ~の上に	連続 	教師キリストから、 贖罪者キリストへ	良質の文化にキリストを付け加える	マタイ 5:17-19 22:21 23:2 ロマ書 13:1,6	クレメンス トマス・アクィナス
(4) Christ and Culture in Paradox	paradox 逆説 緊張関係	緊張関係 キリスト 	文化の審判者キリスト	キリストを通ることによって、文化は肯定される	特に明示されていない	パウロ ルター
(5) Christ the Transformer of Culture	transformation 変革	変革関係 キリスト 	回心者及び変革者	変革されなければならず、また、変革される	ヨハネ 3:16-17	アウグスティヌス カルヴァン ウェスレー モリス

(iii) オスカー・クルマンの場合⁽⁵⁾

オスカー・クルマン (Oscar Cullmann) は、1902年3月25日に、アルザス地方の首都シュトラスブルクに生まれた。

クルマンには、Christus und die Zeit (1946年)『キリストと時』という著書があり、これは、宗教と文化との関連を示している典型のひとつといえるので、ここでは、この著書をもとにして、考えてみることにする。

彼は、宗教と文化との関連に対して、次のような図を、提供する。この図に、宗教と文化との関連に対する、彼の考えが、集約されている。



教会と世界、すなわち、宗教と文化は、接し合っているか、あるいは、交叉し合っているか、あるいは、一致しているか、というようなものではない。教会と世界、すなわち、宗教と文化との関連において、中心を共にする二つの円環を思い浮かべなければならない。その共通の中心とは、キリストである。内側の円形 (r_1) は教会であり、二つの円周の間の平面 (r_2) は世界であり、円環全体 ($r_1 + r_2$) はキリストの領域である。内側の円形は、外側の円形よりも、キリストに近い関係にあるが、キリストは内側と外側のいずれの円形の中心でもある。(Bp.188) さらに、クルマンは、次のように、説明する。確かに内側の領域 (r_1) も罪の人間達によって構成される。しかし、彼らは、キリストにある贖いを信じ、そして、その信仰において、キリストが彼ら自身ならびに世界を支配することを知っている人達である。自余の、見えるまた見えざる世界も、いうまでもなくキリストによって支配されている。しかし、世界自身は、それを知らない。(Bp.188-p.189)

上の図形の根拠は、マタイによる福音書第28章18節、ガラテヤ人への手紙第4章19節、エペソ人への手紙第1章10節、22節と23節、第3章10節、コロ

サイ人への手紙第1章28節、2章10節、テモテへの第二の手紙第2章12節、である。

(iv) 武田清子の場合⁽⁶⁾

武田清子は、1917年6月20日に、兵庫県に生まれた。

武田は、『土着と背教』(1967年)において、キリスト教受容の形態を提起し、それを五つのタイプに分類している。これは、日本におけるキリスト教の受容の形態にとどまらず、異質の思想が出会う場合の出会い方の形態や宗教と文化との関連の形態としても適用できる一般性をもった類型化であるといえると思うので、武田があげた五つのタイプを参考にしながら、宗教と文化との関連を、考えてみることにする。武田のいう五つのタイプとは、(1)埋没型(妥協の埋没) (2)孤立型(非妥協の孤立) (3)対決型 (4)接木型あるいは土着型(対決を底にひそめつつ融合的に定着) (5)背教型(キリスト教を捨て、あるいは、教会に背き、いわゆる背教者となること、あるいは、そのことによって逆説的にキリスト教の生命の定着を求める。) である。

(1)埋没型について

武田の説明によると、この型は、キリスト者をよそ者として排斥する国柄の中で、何とかしてこの国の人々の反感を緩和し、その心と生活とに根をおろそうとする努力に出発しながら、順応し適応することの方に重点がおかれるうちに、知らず知らずのうちに足をすべらせて、日本の土壌に引きずり込まれて、キリスト教が日本人の問題の救いとなるよりは、むしろ換骨奪胎されてしまっていて、キリスト教の本質そのものをも変質させ、あるいは、喪失してしまうまでに、日本化していくありがたである。(Cp.7-p.8)

(2)孤立型について

上述の、妥協の埋没を恐れ、キリスト教に対して偏狭な排撃をくらわすか、あるいは、飼い馴らして換骨奪胎してしまいかねない日本の歴史的現実にはできるだけ関わりをもたずに、キリスト教の純粋性を保とうとする道を追求したタイプである。(Cp.8) このタイプは、教会中心の礼拝と交わりとにキリスト者としての生活を見出し、政治的、経済的、社会的領域のいわゆるこの世の問題にはできるだけ接触すまい、手を汚すまいとする。(Cp.8) 従って、このタイプは、意図せずして、二元論(異なった原理との平和的共存型)になってしまう。(Cp.9)

(3)対決型について

これは、日本の精神的伝統に内在する古い価値や古い規範のうち、キリスト教の真理と相対立し矛盾する要素を選び出し、それと対決することによって、土着しようとする戦闘的タイプである。(Cp.9) 対決の中心は、多神教から唯一神へと転換する、神観における対決であった。

(4)接木型あるいは土着型について

(土着を積極的に求めるのであるが、対決型のように、古い規範の非キリスト教的な要素を抉り出して、それと真正面から対決するという方法ではなくて、)日本の精神的伝統に内在する諸価値の中から、積極的可能性を潜在させた萌芽と考えられる要素を選択して、そこにキリスト教の真理を受肉しようとする試みである。このタイプは、対決を根底的課題としながらも、真正面から対決をいどむことなく、その土壤に内包された積極的可能性のある要素を砧木として新しい生命を接木し、砧木の生命との交流の中から、その新しい生命の花を咲かせようとするタイプである。(Cp.10-p.11)キリスト者になるということは、罪の子である人間に、善き人である神の子キリストが接がれることによって、悪しき人なる罪の子の果ではなくて、神の子の善き果を結ぶにいたる。(Cp.12)

(5)背教型について

武田の説明は、次のようである。ゆがみ(例えば、儒教的な倫理思想を濃厚に浸透させていたり、キリスト教会に家族主義的共同体の要素を忍び込ませていたりなど)を内在させたキリスト教会の中に、「良い子」となって安住することの「偽善」に耐え得ず、キリスト教を捨てることを宣言し、あるいは、教会を脱退し、背教者の烙印を押されることを辞せず、背教者と呼ばれつつも、キリスト教から触発されたある価値を日本の土壤に実現して生きようとして、教会ないしキリスト者の群れを自発的に離れていった棄教者あるいは背教者のタイプである。(Cp.14)

Ⅲ まとめ

パウル・ティリッヒ、リチャード・ニーバー、オスカー・クルマン、武田清子における、宗教と文化との関連を、これまで別々にみてきた。最後に、四人の考え方のエッセンスを抽出して、それをできるだけ比較対照して、表にまとめると、次のようになる。

パウル・ティリッヒの場合	リチャード・ニーバーと武田清子の場合	オスカー・クルマンの場合
文化は宗教の表現(形式)であり、宗教は文化の実質である。 (Culture is the expression(form) of religion, religion is the substance of culture.)	Christ against Culture = 孤立型 The Christ of Culture = 埋没型 Christ above Culture = 接木型 Christ and Culture in Paradox = 対決型 Christ the Transformer of Culture = 対決型	キリストは、教会のみならず世界(文化)の中心でもある。そのことを知っているか否かが、教会と世界とを、分つのである。

以上のように、表にしてまとめてみると、興味深いことが、みえてくる。パウル・ティリッヒは宗教と文化とは相関があるということをとにかく主張したかったといえるし、オスカー・クルマンは、キリスト(宗教)と文化との間の逆説(paradox)や、実存的にキリスト(宗教)と関わるというようなことには興味がなく、彼は、キリストは教会と世界との両方の支配者であるということに、全的信頼を寄せ、そのことに何ら疑いをもっていないということがわかる。リチャード・ニーバーの分類と武田清子のそれは、共通するところが多いのも、興味深い。違うところは、武田清子が提出した背教型が、リチャード・ニーバーの分類にはないということだけである。ここに、すなわち、背教型が武田の分類にあるということに、宗教と文化との関連における日本人の特殊なありようがあるのかもしれない。

(注)

- (1) パウル・ティリッヒ研究 (I) 参照
- (2) パウル・ティリッヒ研究 (I)、(IX) 参照
- (3) パウル・ティリッヒ研究 (I) 参照
- (4) リチャード・ニーバーの場合における引用は、すべて、Christ and Culture (A)『キリストと文化』(A') からである。
- (5) オスカー・クルマンの場合における引用は、すべて、『キリストと時』(B) からである。
- (6) 武田清子の場合における引用は、すべて、『土着と背教』(C) からである。